

31. 解答 c

- a.誤：大腿骨、上腕骨の近位骨幹端が好発。30歳以下に見られる。
- b.誤：手足の短管骨骨幹端に好発。
- c.正：骨端に好発。30歳以下に見られる。
- d.誤：骨幹端に好発する膨張性溶骨性病変。長管骨や脊椎、骨盤骨に多く見られる。脊椎では後方成分に好発。
- e.誤：骨幹端の偏心性透亮像。膨隆性変化と分葉状の硬化縁を伴う。30歳以下に見られる。

32. 解答 b

- a.正：Loose' s zone（骨皮質に直交する帯状の透亮像と辺縁の硬化像）の出現
- b.誤：感染性のものと強直性脊椎炎やRA、炎症性腸疾患に伴う非感染性のものがある。
- c.正：アミロイド沈着で障害を来す関節疾患の大部分が透析アミロイドーシス。
- d.正：椎体周囲の腫瘤形成が感染性に比して少なく、T2WIにて低信号を呈するのが特徴
- e.正：ビタミンD活性化障害、P排泄障害などを基盤として低Ca血症となり、PTHの分泌亢進がもたらされ副甲状腺の過形成が起こる。

33. 解答 e

- a.誤：初期には狭小化が乏しい
- b.誤：両者に見られる。
- c.誤：結核性のほうが広く伸展する(3椎体以上が多い)が、化膿性でもみられる。
- d.誤：月単位のことが多い。
- e.正：化膿性では稀。

34. 解答 c

- a.正：骨髄の限局性浮腫を反映
- b.正：伴うことはある。特に軟骨下骨に生じた場合。
- c.誤：大腿骨外側顆と脛骨平原後方が直接に衝突して生じる（kissing contusion）
- d.正：骨髄の限局性浮腫を反映
- e.正：外側脱臼が最も多く、大腿骨外側顆関節面と膝蓋骨が衝突した際に生じる。

35. 解答 a, d

（骨端線＝成長板）

- a.正：他にLoose' s zoneの出現や予備石灰化層の消失と刷毛状のぼけが特徴。
- b.誤：軟骨下骨の線状透亮像や骨端の分節化、骨硬化などが特徴。
- c.誤：骨年齢が進行しているのでむしろ狭小化（もしくは閉鎖）している。
- d.正：骨端線に離開が生じ、骨端が内下方にすべる疾患。他には骨端線に面した骨幹端の不

明瞭化と骨硬化像や骨端の高さの減少がみられる。

e.誤：関節表面から骨端線を貫通し、骨幹端をよぎる関節内骨折。

36. 解答 d

a.正：高齢者に多く、骨強度低下を来しうる基礎疾患がある

b.正：他には骨粗鬆症や骨軟化症、長期ステロイド治療、腎性骨異常栄養症、RA、副甲状腺機能亢進症など。

c.正：骨シンチでH型の異常集積を示す。

d.誤：転位を起こすことは少ない。

e.正：坐骨も同様。偽関節形成のために骨折部周囲に腫瘤形成を伴うことが多い。

以上、解答 31-36 は野見山弘行会員（九州労災病院）